第2回：科学技術の発展を支えるお仕事

山　下　真　依

〈兵庫県立大学理学研究科光学赤外線天文学講座　〒679-5313 兵庫県佐用郡佐用町西河内 407-2〉
e-mail: yamashita@nhao.jp

キャリア支援委員会が企画するこの連載では，アカデミアを飛び出し，広い世界で活躍する天文学出身者の姿を追います．2022年11月号に掲載された初回のレポートに続き，今回も当事者である学生さんに記事執筆をお願いしています．今回の連載では，文部科学省の室田優紀さんに，兵庫県立大学の博士課程に在学する山下真依さんから話を聞いていただきました．研究者にとってもっとも身近な省庁のひとつである文部科学省ですが．そこはいったいどのような職場なのでしょうか．インタビューから見えてきた生き生きとした官僚の姿について．山下さんのレポートをお読み下さい．（キャリア支援委員会）

今回，ご縁があってキャリア支援委員会の企画として文部科学省の室田優紀さんにインタビューをさせていただきました．インタビュー先の候補者の方々から室田さんを発見したとき，私の指導教官である伊藤洋一先生が「地方大学出身で官僚になる学生は少ないのはどうしてだろう？この大学からも官公庁に就職する学生がいてもよいのに」とおっしゃっていたことが脳裏によぎりました．それが今回お話をお伺いする強い動機となりました．

入省直後の室田さん．国会議事堂の前にて．

室田さんは修士課程を修了後，文部科学省に入省して総合職を務め，今年で7年目になります．現在の所属は2021年10月に設立された大学研究力強化室．そこで研究力強化推進係長として10兆円規模の大学ファンドの事業に従事するだけでなく，委託調査の企画・立案や法制度の改正に係る検討，有識者会議の立ち上げなどに取り組んでいます．ほかにも，ノーベル賞対応などの突発業務や採用関係の業務をお手伝いも．室田さんのご活躍は文部科学省の入省案内パンフレット [1] にも特集されていますので，ぜひチェックしてみましょう！

全国ニュースになる大きな決定を目の当たりにした入省前後

東京都にある女子校出身の室田さんは，宇宙に興味があって東京大学の物理学科に入学しました．研究室配属の頃には「ひとみ衛星を使いたいからX線の研究室に進みたいです！」という学生が周りに多かったそうです．室田さんも「衛星の打ち上げ楽しみだな～ALMAの研究室もちょっと迷うな～」と思いながら，最終的にはX線宇宙

物理学の研究室に入りました．X線の観測には，大きな予算が必要となる衛星が必要不可欠です．室田さんも大学院での研究活動を通じて，国の予算やサポートがないとできない研究があるということを実感しました．このとき「自分が支える側として研究に貢献できるのではないか？」と考えたことが，後に文部科学省を志したきっかけとなりました．

文部科学省での仕事では，一般にも注目される「大きな決定」に関わることも少なくありません．入省直後に関わった仕事でよく覚えているのが，ISEF（International Science and Engineering Fair）という国際会議です．これは，文部科学大臣も出席するような，今後の宇宙開発の方針を決める重要な会議です．宇宙飛行士の方が司会として会議を取り仕切っていたり，傍聴して発言している様子を目の前で見たり…「すごいな，こういうこともできるんだ．まさに国ならではのお仕事だな…」と思ったそうです．

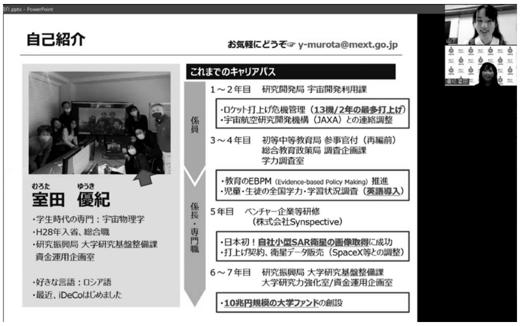
入省後，最初に配属された宇宙開発利用課では，ロケット打ち上げの危機管理や予算措置，連絡調整，新しく立ち上げる法人の認可といったお仕事に携わりました．X線宇宙物理学出身の室田さんが，自分の出身分野に近い課に配属されたのは偶然だったそうです．例えば同期の航空宇宙工学出身の方は，原子力関連の課に配属されました．宇宙開発利用課でのさまざまな仕事の中では，ひとみ衛星の後継機であるXRISMの予算申請を目の当たりにすることもありました．研究者や財務省だけでなく，世論との板挟みにもなって予算について話し合うなど難しい調整もありましたが，室田さん自身も思い入れのあるプロジェクトで，やりがいを感じる，入省してよかったなと感じられた瞬間でした．私が後輩から聞いた話では，今は「XRISMが打ち上がるから，X線の研究室を志望します！」という学生も多いそうです．まさに室田さんたちのお仕事が，後輩たちに夢を与えていることを実感します．

学生時代．JAXA 筑波宇宙センターにてジャンプ！

性別を問わない働きやすさ

文部科学省は女性採用が多く，また，長く働くことが前提に制度設計がなされているので，性別を問わず働きやすい職場となっています [2]．室田さんもインターンシップの時点で「あっ…女子多いな」という印象を受けたそうです．そのインターンシップの最中になんと，室田さんはロールモデルとなる方に出会えたのでした！宇宙開発利用課で当時課長補佐をされていた女性の先輩が，とてつもないスピードで大事そうな案件をバリバリとかっこよくさばいていく．そんな姿を見て，室田さんもこうなりたいと思ったのが文部科学省へ官庁訪問に行く直接のきっかけとなったそうです．今では「女子学生霞ヶ関インターンシップ」という人事院主催の女子学生限定のインターンシップもあるそうです．

ふだんの勤務は，国会対応など急なお仕事が入ったときは別として，柔軟な働き方ができるそうです．勤務時間をずらす人も少なくなく，室田さんも「朝が苦手なのもあり10時から出勤しています（笑）」とおっしゃっていました．私は光赤外の観測屋さんで同じ研究室には夜行性の人もたくさんいますが，そんな我々にも優しそうですね．ご家族の都合に合わせられるように時短勤務もありますし，子どもが熱を出したから午前で帰って午後からはテレワークにします！というこ



インタビューの様子.

とも可能です．室田さんによると「男女の分け隔てなくバリバリ仕事ができる環境にあるかと思います」．以前所属していた学力調査室では，室長・室長補佐・室田さん・部下の全員が女性でした．そのうち室長と室長補佐はそれぞれ2人ずつお子さんを育てられたそうです．官僚の方は育児休暇をとっても，ほとんどの方が職場復帰します．室田さんの部下だった方も育児休暇を取りましたが，その方は最近復帰され，京都勤務の旦那さんに合わせて今は京都の文化庁にいるそうです．人事に希望を伝えたら，このように生活面へ配慮してもらえることもあります．

出向はどこへ？

兵庫県出身の私としては，関西を拠点に働けるのは大きな魅力です．各都道府県には1–3人くらいが出向しているそうで，私の身近では，神戸大や兵庫県教育委員会なども出向先としてあるそうです．インタビュー前に下調べをしていたら“教育行政は地方色が強いため，地方大出身というのは強みになる”という意外なことも知ったので[2]，これについても室田さんに聞いてみました．「省庁というとやはり東京の大学出身の人が多いイメージかと思いますが，最近は多様性が叫ばれており，さまざまな大学から来られた方が活躍されています．○○県人会というような集いもあるそうですよ」．地方国立大学出身の方が，その大学の総務課長として出向されているケースもある

COSPARでモスクワ大学に行くことができました（大きい！）

そうです．職員に経験を積ませるという観点からは必ずしも本人の希望通りになるわけではありませんが，タイミングが合えば出身地に戻って仕事することもできるのです．

室田さんのように「行ったことないところがいいな」という考えで出向先を希望し，キャリアを積んでいくことも可能です．室田さんも，入省三年目の研修として九州工業大学の寮に1ヵ月間滞在し，研究協力課で科学研究費の取りまとめや文部科学省への事務手続きのお仕事をされたそうです．ほかには学生と「単位取れませんでした！」「えっ必修って言ったよね !?」と直接コミュニケーションを取るお仕事や，海外からの留学生支援に携わる官僚の方もいらっしゃいます．

ここまで室田さんは1, 2年ごとと，比較的短いタイムスケールで部署が変わっています．省庁ではエンジニアや研究職とは違って，エキスパートではなくジェネラリストとして育成されるからです．そのため，異動のたびに新しい会社に入り直したのと同じくらい環境が変わります．宇宙開発利用課で即戦力になった室田さんも，教育系に配属された当初は「自分ができるのかな…」と不安に思いました．そういうときには“新しいことを

学ぶのが好き”という，学生時代からの姿勢が役に立ちました．そして人と人との交流が盛んな環境にも助けられているそうです．「省庁というトップダウンで堅苦しい職場をイメージされているかと思いますが（笑），シンプルに風通しのよい職場で，上司とも昼休みなどの隙間時間によく雑談をしています」．一緒に働く仲間たちの存在は，大変な仕事を乗り越える時には大きな力となるのです．

2020年に都内のベンチャー企業に出向されたときには，行政官として身につけた調整能力はどこにいっても重宝されるスキルだということを改めて感じたそうです．「『調整能力』というと，学生の頃はなんとなく飲み会の幹事とかそういうイメージでしたが（笑），社会に出ると，人間関係やパワーバランスを把握してうまく立ち回り，トラブルが発生しそうなところにいち早く気づき，さまざまなステークホルダーから相反する意見が出てくる中で，物事を進めていくための判断力や実行力を兼ね備えていないといけない…などなど，というようなスキルが必要となります」．日々の業務を通じて，そういった能力がおのずと鍛えられていることを実感するそうです．

今後，どんなお仕事に挑戦してみたいのか？お伺いいたしました．「学生の頃から専攻していた宇宙分野に関心が高いので，また宇宙分野に携わりたい思いもありつつ，スポーツや文化といったこれまでに担当してこなかった業務にも幅広く興味があります」．また，学部時代に第二外国語として学んだロシア語は今でも勉強を続けているそうです．現在は難しい状況ですが，ロシア大使館での勤務にも憧れがあるそうです．

悩める学生・ポスドク必見!! 就活の事情

さて，文部科学省への就職は，どんな人に向いているのでしょうか？以下の6つの問いに答えて診断してみましょう（室田さん作成）．

1）「人」と「知」の力で日本の未来を創造するという理念に共感できる　→[yes/no]
2）「教育」「文化」「スポーツ」「科学技術」という幅の広い業務に興味を持って取り組める　→[yes/no]
3）研究や科学技術の発展に何かしら貢献したいという思いのある　→[yes/no]
4）有識者の方々の思いをまとめ実行することにやりがいを感じる　→[yes/no]
5）世の中の機運を醸成していくことに思いをもって主体的に取り組める　→[yes/no]
6）虎ノ門周辺のグルメに強い興味・関心がある（笑）　→[yes/no]

はい，ここで [yes] が多かった方はぜひ室田さんが載った入省案内パンフレット [1] を読んでインターンシップへの参加を検討しましょう！室田さんの同期13人のうち5人が博士卒で，ポスドクや企業研究員からの受験者も少なくありません．准教授を経て総合職という方もいらっしゃいます．天文月報2022年1月号「オンライン進路相談会の実施報告」で「文部科学省には1年に1人くらいは，宇宙物理分野出身の人が入省してきています」とおっしゃっていましたが [3]，例えば宇宙論の理論の方や系外惑星の観測をされていた方，航空宇宙工学の専攻の方などがいらっしゃるそうです．文部科学省には教育や科学技術に志を持って入省した真面目な人が多いかな？とのこと

大学研究力強化委員会の様子（出典：文部科学省HP）．

です．

ここで，気になる国家公務員試験の様子をお伺いしましょう．室田さんは博士前期課程への大学院入試と同時期に国家公務員の試験を受験しました．理系の場合は自分の専門で試験を受けられるので「院試の勉強＝試験対策でした」ということだそうです．一次試験ではセンター試験のちょっと難しいバージョンのようなマーク式のテストを受けます．午前が教養（数的推理，英語，歴史）で，午後は数学や地球物理学を受けました．二次試験は数学や物理学の記述試験です．ただし院試のほうが難しかったそうです．なので予備校に通う必要はなく，過去問を解きましょう．三次試験は面接です．

ここまで突破できたら次は「官庁訪問」です．全部で5クールあります．まず第1–2クールで3省庁まで訪問できます．室田さんのように文科省だけ訪問することもできます．そして選考を受け，第3クールまで残った人は，今度は省庁を第1–2希望までしぼります．次の第3クールは大変です．朝9時から夕方まで一対一の面接を5–6人から受けることになります．ここでは「文部科学省に入ってどういう仕事をしていきたいのか？」を面接官とお話します．面接されるだけでなく，学生側からも「一緒にお仕事して楽しいのか？」を確認する場でもあり，お互い面接し合うイメージでした．室田さん情報によると，文部科学白書 [4] を読み込んでいく人もたまにいるが，これは入ってから勉強していけばよいのではとのことです．むしろ資料をざっと読んで，自分がどういうことをやりたいのかイメージを膨らましていくことと，面接官と会話のキャッチボールをすることが大事なのだそうです．

D進するか迷うよね〜〜〜

実は室田さんは文部科学省のインターンシップに参加するまでは，基本的には博士後期課程を修了してからの就職を考えていました．国家公務員の合格は当時3年間有効でした．博士後期課程に進学すると在学中に有効期限が切れてしまいます．海外で活躍するキラキラとした研究者になりたいという夢を描いていた一方で“好奇心旺盛で色んなことに興味がある”室田さんは，博士後期課程で一分野を究めることへのジレンマも抱えていました．一人っ子なのでご家族のことも気になったり…．

博士後期課程への進学って迷いますよね．2019年には，女性アイドルよりも博士後期課程に在学中の女子学生のほうが少ないということがインターネットで話題になりました [5]．私も勤務地を転々とすることを恐れ，修士二年まで迷いました．結局は自分の「若い星の大気の活動度」というテーマがおもしろすぎて，研究を進める手が止められなかったので進学に至りました．

室田さんの場合は官庁訪問で「修士卒で就職するのもいいかな」と決心がついたそうです．実際に働いている職員の方との面接では，修士卒で文部科学省に入るか，博士課程に進むか50 : 50で悩んでいることを打ち明けました．ただし博士課程に進学した場合でもアカデミアに残りたいわけではなく，どちらかといえばマネージャーのように研究環境を整備して科学技術に貢献したいと考えていることも伝えました．すると「博士卒でもいいけれども，室田さんと一緒に働きたいのでぜひ文部科学省へきませんか」とお声がけいただき，修士論文を書いて今に至ります．これは…まさに引き抜きみたいでかっこいいですね…！

室田さんから私には「仕事で何を優先したいか（給料？やりがい？ワークライフバランス？）というのも千差万別ですし，向き不向きというのもある程度あるかと思います．どういったキャリアパスに進まれるとしても，自分の希望とあうかどうか，その職場で働いている人たちと一緒に働きたいと思えるかというようなところをよく確認して，悔いのない選択をできるよう応援しています!!」とメッセージをいただきました．私の好

きな言葉に「不可能を可能にする」というものがあります．自分の選択肢として考えられない時点で，それは不可能となるわけです．私は今まで官僚の方とお話したことがなかったので，霞ヶ関はまるで別世界のように思っていました．それでも室田さんとお話しさせていただいたおかげで，地方大の学生にとっても不可能を可能にすることができると確信しました．どんな学生でも，霞ヶ関までのギャップを埋めるためには，まずは省庁への就職が選択肢に加わることが必要不可欠です．次は入省案内パンフレットを見てみようとか，インターンシップの情報を調べようとか，自分がそこで働くイメージを手堅くつかむ行動へのきっかけに繋がればと思います．

謝　辞

お忙しい中インタビューのお時間をいただいた室田優紀さん，本稿の執筆機会をくださった日本天文学会キャリア支援委員会の高梨直紘さん，東京大学の森万由子さんにお礼申し上げます．

参 考 文 献

[1] 文部科学省, 2023, 文部科学省入省案内総合職パンフレット, 7–8
[2] 村木厚子, 秋山訓子, 2015, 女性官僚という生き方, 岩波書店
[3] 高梨直紘, 2022, 天文月報, 115, 30
[4] 文部科学省, 文部科学白書
[5] 文部科学省, 学校基本調査報告書